人は何によって生きるのか

奨励	大山 修司〔おおやま・しゅうじ〕
奨励者紹介	日本キリスト教団膳所教会牧師 聖愛幼稚園園長

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、〝霊〟に導かれて荒れ野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。
「『人はパンだけで生きるものではない。
神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』
と書いてある。」次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、言った。
「神の子なら、飛び降りたらどうだ。
『神があなたのために天使たちに命じると、
あなたの足が石に打ち当たることのないように、
天使たちは手であなたを支える』
と書いてある。」イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。すると、イエスは言われた。「退け、サタン。
『あなたの神である主を拝み、
ただ主に仕えよ』
と書いてある。」そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

（マタイによる福音書　４章１―１１節）

目に見えない大切なものがある

イエスはここで「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」ということを言われました。人は何によって生きるのだろうかということを考えさせる言葉であります。私たちは日頃、人は何によって生きるのかということはあまり考えないかもしれません。でもそうやって質問されて考えてみれば、あれもこれもといろいろなことを思いつきます。まずは生活することが大事ですから、日ごとの食べ物や必要なもの、それを得るためのお金も必要です。そして収入を得るための営み、職をもつということや技術、資格をもつということもそうでしょう。また、家族がいてくれるということも大事です。生きるにあたっていろいろとたくさんのものが必要だと思います。

しかし、聖書は目に見えないところのものを殊に重んじているのであります。新約聖書には「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」（コリントの信徒への手紙二４章１８節）という言葉があり、また「信仰とは望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちはこの信仰のゆえに神に認められました。信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです」（ヘブライ人への手紙１１章１―３節）という言葉があります。これらの言葉は、目に見えないもの、しかも存在するものをその背後から成り立たせているものに注目させているのです。創世記は万物が神の御言葉によって創造されたということを描いていますが、この存在を成り立たせている神の御言葉に立脚するようにということが言われているわけであります。

しかし、こうした人を生かすものについての問いは、私たちの日常の生活においてはあまり意識されず、また深く考えてみるということもあまりないことなのかもしれません。

試練の中で人は何を選択するのか

ところでこの聖書の場面は、イエスが荒野で相当な日数を過ごし、肉体的に弱り果て、生命の危機的状況に置かれているということが想像できるものです。しかもそこに悪魔と言われる者が現れ、イエスを試みようとしているのです。イエスにとっては極度の苦しみの中でどう生きるかということが迫られているのであります。

また福音書記者はこの物語を、出エジプトを経験した古代イスラエルの物語を意識して書いていると言えます。遠い昔、エジプトで奴隷として辛酸をなめたイスラエルが、神の驚くべき力によって解放されたという故事が背景にあるわけです。けれどもこの民は、40年ともたとえられるような長い荒野の旅をしなければなりませんでした。解放された直後から試練を受けなければならなかったのでありました。旧約聖書の申命記は、神があえてイスラエルを苦しめ試みたのだというのであります。「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった」（申命記８章３節）とあります。つまり、それは神から与えられた試練として受けとめなければならなかったのです。けれどもこの民は食べ物が少なく、のどが渇くという状況で、なぜこんなところに連れ出したのかと指導者モーセを呪い、神を疑い離れてしまいました。神の語られる言葉によってマンナという食べ物が与えられ、水が与えられ、必要なものが満たされるのでありますが、しかし、かつてエジプトにいた時のように肉鍋が食べたいとつぶやき、エジプトはまだましだったと不平を漏らす者たちが出てきたのです。そしてモーセがシナイ山に行っている間に、自分たちを早く導き出し、物質的に豊かにしてくれる神をつくろうと言って、金を集めて金の子牛の像をつくり、これを神にしようと騒ぎ戯れたのでありました。それで多くの命が失われる事態となり、裁かれることになったのでありました。

ここでは苦しい状況におかれた時、人は何を求めるのか、何によって生きるのかということが厳しく問われていることが描かれているのでありますが、そこで人は分裂してしまったということなのであります。物質的欲望を象徴する偶像の神に支配されやすい人間の現実があらわになるのであります。

「限界状況」ということを重要なものとして定義づけた哲学者のヤスパースという人はこう言っています。「人は限界状況を超えていこうとする時、圧倒的な自然から送られてくる暗号の意味を一瞬のうちに理解する」と。人は極度の困難や挫折の中にありながらもそれを越えていこうとする時、自分の力ではない何者かが働いているのを知ることがあるということです。つまり、超越者の存在を感じられる体験ということでしょうか。けれども一方で彼は、限界的な状況にありながらも「超越者の声」を聞かない人があまりに多いということも言っています。いざという時に、目に見えないところからくる暗号を聴き取ろうとするのかどうかということなのでありましょう。

人間の欲望の問題

日本では、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故を経験し、極度の大きな苦しみを味わった方々がおられ、まだ声になっていないかもしれないけれども、私たちはその証言の声を本当に謙虚になって聴こうとしているのかということが問われます。ところがこういう状況で、原発の再稼働や、景気の回復、経済成長戦略というスローガンが掲げられているということは、苦しむ人々の存在を全く無視しているように思えます。「どこかおかしくないだろうか」「いやおかしいよな」という違和感を覚えます。未来のことよりも今の即物的な利益のことだけを重んじているようにしか思えません。これからどっちの方向に行くのかということが私たち一人ひとりにも厳しく問われているのだと思います。

イエスは、荒野での４０日の断食の果てに悪魔の誘惑を受けます。一見すると悪魔は激しい攻撃をしてイエスを倒そうとしているようには見えません。今日の箇所にありますが、注意してみたいことは、人間が欲しがっているものや事柄を提案しながら近づいているということです。悪魔はイエスに「あなたが神の子なら」こうしたらどうだ、と提案して語りかけたように、甘く囁くようなそぶりで、あなたは誰なのかということを問うてくるのです。「あなたは自分が何者か証明してごらんなさい。神の子だと聞いているから、きっと他の人より優れているのでしょう。そのすごいところを見せて、自分の存在の価値を示してみたらどうか」というのです。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」と提案しました。石がごろごろしたところですから、これをパンにしたらおなかが満たされるし、それだけでなく、たくさんのパンができるのだったらそれこそ大量生産ですごいことができますよ、ということでもありましょう。また、神殿の頂きから身を投げてみよと言います。そうしたら天使たちが飛んできてあなたを支え助けてくれる、そうしたら神殿に来ているたくさんの人たちがあなたを見てすごい賞賛を送ってくれるし、名声が得られるでしょう、と言うのです。そして、自分を拝むなら、この世の権力、繁栄、すべてのものがあなたのものになるだろうと囁くのであります。そうしてあなたは「神の子か」と問うのです。これらのものは世の多くの人が欲しがっているものであって、そしてそのために争っているものであります。すでにある程度もっているのに「もっともっと」という具合になっていくのです。昔から今日まで、帝国という国々や人々がそれを求めて争い、戦争をして人の命まで奪ってきたものなのであります。

その結果もたらされるのは一体何でしょうか。この悪魔がもし私たちに「あなたは一体誰なのか」と聞いてきたら何と答えるでしょうか。私たちは今、他の人よりも高い評価を得なければ、多くのものを手に入れなければ、そして多くの資格や業績をもっていなければならないというような時代の風潮の中にいます。そして自分を大きくすること、大きく見せることに夢中にさせられているのでありますが、しかし、そのことが多くの人を犠牲にしてしまっている現実もあらわになっているのであります。

現代世界はどこへ行くのか

哲学者の柄谷行人さんは、資本主義は高度に発展すればするほど「一般的利潤率の低下」が起こるということを言っています。これまで資本は常に「外部」というものを求めてそれを免れようとしてきたわけで、かつての帝国主義が「外部」への脱出をなしてきたのであり、今また「資本の輸出」ということが行われ、もっと安い賃金の他国に工場を移転させて利益を得ようとしてきました。ところが、その「外部」がなくなってきている状況だと言われるのであります。今日の新自由主義の経済においては、一つには絶え間ない技術革新が必要

であり、また安価な労働者がいつもいなければならず、そして新たな消費者の参入が必要だということが言われています。常に新しいものをつくりだして、人々の欲望をかき立て、そしてそれをできるだけ安く、多くを売ることによって成り立ってきた仕組みというのが世界のどこにでもつくられています。そうして世界のどこにでも格差社会というものができ、非人間的な労働環境におかれている人々が生み出されているわけであります。こうした世界はいつまでも続くのでありましょうか。どこかおかしいのではないかと思いますし、限界が近づいているのなら、これまでとは異なった新しいあり方、人々の新しい暮らしの仕方というのが議論されて当然なのであります。働く人の環境や地球の環境も疲弊しきっているというのが現状だと思います。

もちろん、この世に生きている限りにおいて必要なものはありますしお金も必要です。しかしそれだけに頼るとすればどうでしょうか。それらはこの世が与えるものであり、それらはいつか取り去られる時が来るのです。この世のものだけに依拠するのならば「死んだらすべてが終わりだ」という論理が生まれてきますし、そして死んですべてが終わりなら、次の世代がどうなろうが構わない、今さえよければあとはどうなってもいいという具合になってしまうのであります。人を争わせ、孤立させ、死に閉じ込めるという悪魔の本当の恐ろしさがここにあると言えます。

この世の権力や人を引きつける数々のものによって左右される人生は、実はもろいものです。アンリ・ヌーウェンという神学者は「真の自分とは何かということを見失っている時、人は必要のないものまで手に入れ、それで自分を証明しようと、多くの時間とエネルギーを無駄にしてしまう」ということを言っています。自分は造り主なる神の前で、そしてすべての人々と命を育んできたこの世界の中で、自分は本当は何者であるのか、そしてどこにつながっているのかということを確認しようとすることはとても大切なことであり、これからの歩みにおいて考え続けたいものであります。

イエスの闘いの意味

今日の聖書箇所、１１節に「悪魔は離れ去った」とあります。イエスは、「人はパンだけで生きるのではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と言われ、ただ主なる神にのみ仕えるべきことをはっきりと示されたからです。イエスはここで悪魔の誘惑に打ち勝たれましたが、しかし、「お前が神の子なら」という言葉はもう一度、十字架の場面で投げかけられることになります。「お前が神の子なら、自分を救ってみろ。他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば信じてやろう」とあざけりを受けました。そうすれば神の子だということが証明されるだろうと言うのです。しかしイエスは、そのような形で神の子となることを拒まれ、人間としての最も大きな苦しみを全うされたのでありました。なぜでしょうか。私たちにはその御心を悟ることはなかなかできません。しかし、それで終わりでなかったということを私たちはしっかり覚える必要があります。私たちにはなかなか悟ることができませんが、苦しみということの中に実は深い意味が隠されています。主イエスは本当の命への道を示されるために、大きな苦しみを味わわれたのです。

「あなたはわたしの愛する子」という天の声をきいて、イエスは荒野へ赴き、そしてこの生涯を歩まれましたが、神の言葉は、私たちにこの世でどう生きよと語りかけているのか、深く問い続けて歩みたいものであります。皆さんの学びがよい実りとなりますようにお祈りいたします。

２０１４年６月３日　今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録